

スーパーヒーローとアメリカ社会

森田 匡

(堤林研究会 4年)

序論 アメリカとコミックス——コミックスの中のスーパーヒーロー

- 1 「アメリカンコミックス」とは
- 2 なぜアメリカンコミックスなのか
- 3 なぜスーパーヒーローなのか
- 4 アメリカンコミックス黎明期

I 「キャプテンアメリカ (Captain America)」

- 1 第二次世界大戦
- 2 『キャプテンアメリカ：ニューディール』

II バットマン——『バットマン：ダークナイト・リターンズ』と『ウォッチメン』

III アイアンマン

- 1 アイアンマンの登場と冷戦
- 2 『シビルウォー』

IV 「スーパーヒーロー」

- 1 『American Power』
- 2 スーパーヒーローとは何か

序論 アメリカとコミックス——コミックスの中のスーパーヒーロー

1 「アメリカンコミックス」とは

近年、日本のアニメーションや「マンガ」は世界に評価されてきている。諸外国では『NARUTO』をはじめとする多くのマンガ作品が翻訳され、「otaku」という言葉は世界共通語となりつつあり、日本こそマンガ文化の先駆者であると思う人も多ときく。しかし、今勢いがあるのは日本の「マンガ」だけではない。

アメリカの「アメリカンコミックス」も1つの大きな文化となっている。その中でも代表的なカテゴリーは何といても「スーパーヒーロー」ものであろう。人並み外れた勇気をもった人物が人々を苦しめる悪に立ち向かうというストーリーは、使い古されてはいるが今もって多くの人に愛されている。誰でも「スーパーマン」や「スパイダーマン」といったキャラクターを一度は耳にしたことがあるだろう。媒体は紙にとどまらず、アニメーション、テレビドラマ、ゲームなど多岐にわたる。特に映画は、発達したコンピュータ・グラフィックスを使いスーパーヒーローをリアルに実写化し、大ヒット作品が数多く世に出ている。

2 なぜアメリカンコミックスなのか

コミックスという文化の中で大きな潮流である日本の「マンガ」と「アメリカンコミックス」には決定的に大きな違いが存在し、アメリカ社会とアメリカンコミックスを比較し考察するうえで重要になると考えた。

決定的な相違とはキャラクターの著作権の所在である。日本では「マンガ」におけるキャラクターの著作権は一般的に作者に存在し、あるキャラクターを別の作者が異なるストーリーで描くことはほとんどない。それに対し「アメリカンコミックス」はキャラクターの著作権を出版社が所持しているため、キャラクターを生み出した作者が亡くなったとしても他の作者によって作品の続きが描かれることはごく当然のことである¹⁾。1940年代に登場したキャラクターでも未だに新作が出版され、作品によっては今までの設定をすべて無に帰し最初からストーリーを作り直すこと、異なる作品を同じ世界で活躍させることや長らく愛されてきたキャラクターを殺すことで2代目、3代目と代替わりすることも少なくない。時代を超えて愛されるキャラクターは、作品が発表された時代によってどのような活躍をするかが大きく異なる。1つのキャラクターを注視することで、そのキャラクターがアメリカ社会で何を求められているのか、そしてその欲求の裏側にはアメリカがどのような状況に置かれているのかを考察することができると考えられる。つまり作者はキャラクターを軸として、キャラクター像を崩さないように活躍させることが求められる。そのため、アメリカンコミックスは作者で分類するよりもキャラクターで分類した方がコミックスと社会の関係を述べるうえでは適当であると考えられる。

アメリカンコミックスはその意味において人気が作家性を上回って重要視されることが間々あり、読者にとっての世論がときとして優先される。そのため、読

者からの手紙によって先のストーリー展開が大きく変わることもある。日本の「マンガ」は作家性が重視されるため、よほどのことがない限り読者からの意見を優先することはないが、「アメリカンコミックス」においては作品が当時の社会の潮流を見てとるための材料となりうる。

この論文において、「マンガ」と「アメリカンコミックス」のどちらが優れているか、どちらが面白いかを論じるつもりは全くない。しかし以上の理由によって、「マンガ」に比べ「アメリカンコミックス」という文化は当時の社会を反映しやすいと予想できる。特にこの論文で「コミックス」を指すものは、複数のコマが連続し台詞はコマ内の吹き出しに収まっていることを基本とする²⁾。これに則ると風刺画はコミックスに含まれない。それに付随して付け加えたいこととして、物語の進行はその大部分がコマ内の絵と台詞によって行われるという点であり、小説の挿絵とは明確に区別したいと思う。

3 なぜスーパーヒーローなのか

アメリカンコミックスを思い浮かべたときにまず頭に浮かぶのはやはりスーパーヒーローであろう。それだけスーパーヒーローの印象は強い。もっと起源をたどれば紀元前には叙事詩や英雄譚として存在していた。ヒーローや英雄の歴史はそれすなわち人間の歴史といっても過言ではないだろう。

時代、文化によってスーパーヒーローに求められる姿は大きく異なり、その姿は人々が望む規範として存在していた。例えば『忠臣蔵』のストーリーにおける47人の赤穂浪士は自らの君主の仇討として吉良上野介を打ち取り、その後切腹した。この実話が侍の美徳、ひいては日本人の美徳として英雄視され語り継がれてきた。しかしこの物語は文化の異なるアメリカ人には、特に切腹した理由が理解できないという。つまりスーパーヒーローの行いや考えをみることで、当時の人々が規範としたものが何であるかと考察することにつながる。

この論文においては、アメリカンコミックスのスーパーヒーローを見ていくことで、時代によって人々がそのキャラクターに何を求めていたのか、どこを規範としていたのかを考察する。特にキャラクターごとにその変遷をみていくことで、多角的に考察していく。

4 アメリカンコミックス黎明期

アメリカにおけるコミックス文化は1896年、『The Yellow Kid』という作品か

ら始まった³⁾。『The Yellow Kid』により、1コマの風刺画からコミックスという文化が生まれアメリカに根付いていくこととなる。当時主流であった連載形式は新聞連載でありコミックスのみを集めたコミックブックは1933年ごろに刊行されたが、当初のコミックブックは主に新聞連載のコミックスを再掲したものであった。1935年、ウィーラー・ニコルソン (Wheeler-Nicholson) はナショナル・アライド出版社 (National Allied Publications) を設立し、そこで再掲ではない新たなコミックスを載せるため『New Fun』を創刊する。

ナショナル・アライド出版社は1938年に『Action Comics』を創刊、そこで表紙を飾った人物こそ「スーパーマン (Superman)」であった。スーパーマンは初登場から絶大な人気を誇り、『Action Comics』創刊号は20万部を印刷したにもかかわらず増刷を求める声が出るほどであった。『Action Comics』はスーパーマンを表紙に小さく出し続けた4号までは売り切れ⁴⁾、19号まで毎号50万部を売り上げる⁵⁾。その結果、1939年にナショナル・アライド出版社は歴史上初めて、単一のキャラクターによって作られたコミック誌、『Superman』を創刊する。

大ヒットとなったスーパーマンの後に続くように1939年『Detective Comics #27』では覆面のヒーロー「バットマン (Batman)」を登場させる。バットマンはコスチュームと覆面によって正体を隠し、人知を超えた力をもたない代わりに知能、推理力、体術に優れたヒーローであった。スーパーマンとは趣が異なるヒーローだが絶大な人気を得、後にその人気にあやかる形で、ナショナル・アライド出版社は『Detective Comics』の頭文字をとりDCコミックス (DC Comics) と社名を変更する。

コミックスにスーパーヒーローという新たなジャンルが生まれると他の出版社も続いてスーパーヒーローを生み出していく。代表を1つ上げるとすれば、タイムリーコミックス (Timely Comics) は「ヒューマントーチ (Human Torch)」や「サブマリナー (Sub-Mariner)」を生み出した。タイムリーコミックスの社長であったマーティン・グッドマン (Martin Goodman) は編集として当時10代であった甥を登用する。それこそが後にコミックの原作を手がけ数多くのヒット作を生み出したスタン・リー (Stan Lee) であった。そしてタイムリーコミックスは後にアトラスコミックス (Atlas Comics) と名前を変え、1957年にはマーベルコミックス (Marvel Comics) となる。他にも多くの出版社がスーパーヒーローを登場させたが、今現在に至るまでスーパーヒーローというジャンルを牽引しているのはDCコミックスとマーベルコミックスの2社である。

こうしてコミックブック、特にスーパーヒーローコミックスは当時の青少年に、そして社会に浸透していった。

I 「キャプテンアメリカ (Captain America)」

1 第二次世界大戦

スーパーヒーローというジャンルが完成し、数々の出版社から数多のヒーローが生まれた。しかし、その中でも「アメリカ」の名を冠し多くの人々に愛されてきたヒーローはマーベル社の「キャプテンアメリカ (Captain America)」を除いて他にはいない。

キャプテンアメリカのコスチュームは青を基調とし、赤・白のストライプが入った全身タイツ、その手にはコスチュームと同じカラーリングの盾を持ち、マスクの額には「A」の文字、そしてこめかみに自由を表す白い羽が付いている。コミックスが出版された年代によって多少の違いはあるものの、誕生した1941年以来この特徴を携えスーパーヒーローとして今もコミック上で戦い続けている。名前、容姿からしてアメリカ合衆国への愛国心にあふれるキャラクターだが、その出自も特徴的で、名前にたがわぬ愛国者ぶりを見せてくれる。

スティーブ・ロジャース (Steven Rogers) はアメリカに対する愛国心にあふれるが、身体的に恵まれず、ひ弱な青年であった。第二次世界大戦の最中彼は軍属を希望するも、徴兵の基準すらも満たすことができなかった。しかし、持ち前の愛国心とナチズムへの義憤により、最強の兵士を作り出す「超人兵士計画」の実験台に志願する。実験は成功し、スティーブはキャプテンアメリカとして生まれ変わり、ナチスの怪人レッドスカルと戦うのであった。

キャプテンアメリカが初登場したのは1941年3月10日にタイムリーコミックスから発行された『Captain America Comics #1』である。刊行当時は第二次世界大戦の真っただ中で、ちょうどこの作品が現実とリンクするかのようにつくられているのがわかる。

当時の第二次世界大戦の状況は、1939年8月にナチスドイツがポーランドへ侵攻、1940年6月にはノルウェー、デンマーク、ベネルクス三国、フランスをも占領し、枢軸国が勢いに乗っていた。その中でアメリカは、ヨーロッパで苦戦を強いられているイギリスを援護するために、戦争に介入するか否かの選択を迫られていた。そのような中で大統領選挙が行われ、1941年初頭、ローズベルト

(Franklin D. Roosevelt) が当選した。ローズベルトは大統領の座に就いてから1940年9月には選抜徴兵法を、1941年3月には武器貸与法を成立させたが、1940年アメリカ大統領選においてローズベルトはアメリカを戦争に参加させないという公約を掲げて当選した。ローズベルトが1940年アメリカ大統領選が近づくと同時に徴兵制を積極的に行わなかった事実を鑑みるに、第一次世界大戦にアメリカが参戦したことの反省から、アメリカ国民がファシズムを打倒するためにヨーロッパの戦争に加担する必要はないという、参戦に消極的な世論を意識していたと考えられる。様々な公約や在任期間の評価が加味されての当選のため、一概にこの公約によって当選したとはいえないが、重要な要因であることは間違いなさであろう。しかしながら、ナチスドイツによって行われたユダヤ人虐殺がアメリカ人にとって衝撃的であり、第二次世界大戦は「民衆の戦争」として国民に受け入れられた。つまり多くのアメリカ国民はファシズムに対して怒りを感じつつも参戦には消極的という矛盾した感情をもっていたと考えられる。

アメリカンコミックスを研究するいくつかの文章によれば、キャプテンアメリカがアメリカ国民に受け入れられた理由にアメリカの開戦へ向かう雰囲気や挙げられる。しかし刊行当時の雰囲気を踏まえるとこのようなアメリカ国民の屈折した感情に呼応するように登場したのがキャプテンアメリカであり、ファシズムと相対するようにアメリカの精神を体現するかのようなキャラクターがアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) を殴りつけるという表紙はその中でも特に衝撃的であり、アメリカ国民が望むも実現は望まない世界を象徴し、アメリカ国民のフラストレーションを解消する1つの手段となっていたともいえるだろう。

その後も戦争が激化していくに従い、戦時プロパガンダ的に敵もナチズムから枢軸国へと移る。太平洋戦争が開戦すると主な敵は日本兵となり、愛国者の鑑として戦争を戦い抜いた。しかし戦争が続くうち、キャプテンアメリカの敵はアメリカを滅ぼそうとする枢軸国を敵として設定しておけばスケールの大きさや凶悪さを簡単に出すことができたが、戦争が終結してからはかつてほど衝撃的な敵を出すことができず、マンネリ化によりキャプテンアメリカは一度作品が終わる。戦争が終わったことでアメリカの精神の具現化であるキャプテンアメリカへの魅力は薄れていった。

再びキャプテンアメリカが復活するのは1954年、冷戦が始まりそして朝鮮戦争があった時期である。かつてナチズムを悪者として戦い人気を博したキャプテンアメリカである。ここでも同様に反共産主義を掲げ再び人気を博そうとした。し

かしナチズムに対して行った悪を懲らしめるために行ったような戦争とは異なりイデオロギーどうしのぶつかり合いともいえる冷戦において、ナチズムと共産主義を単純に入れ替えただけで物語は成り立たなかった。「気をつける、共産主義者、スパイ、売国奴、外国の手先どもよ！ キャプテンアメリカが彼の後に続く忠実で自由なあらゆる人々とともにお前らを探し出してやる……」⁶⁾と言いながら共産主義者を倒していくキャプテンアメリカはあまりにも暴力的すぎ読者の共感を得られなかった。そして復活したキャプテンアメリカはわずか3号で再び終わりを迎えた。

あまりに暴力的すぎた1950年代のキャプテンアメリカは後に後付けで初代であるスティーブ・ロジャースとは別人とされ、行きすぎたスーパーヒーローの危うさを体現したキャラクターとされ初代キャプテンアメリカと戦うこととなるが、それは20年近く後の話である⁷⁾。

2 『キャプテンアメリカ：ニューディール』

2001年9月11日、貿易センタービルに航空機が衝突し多数の死者を出した。2001年当時キャプテンアメリカを有するマーベル社は貿易センタービルから5 km 程度の位置にあった。DC コミックス社をはじめとする他の出版社も緊急号を特別出版し哀悼の意を示したが、マーベル社の対応はその中でも早く、2001年11月にはマーベル社のスーパーヒーローだけでなく敵までもがグラウンド・ゼロに駆けつけるという内容の『Amazing Spider-Man #36』、数十人のクリエイターが参加した短編集『HEROES』を発売した。そして2002年6月に発表された作品が『キャプテンアメリカ：ニューディール (Captain America: The New Deal)』であった。

この作品はかつての作品のように単純化された「いいもの」対「わるもの」の構図を超えて、9.11そしてこれからのテロとの戦いにおけるキャプテンアメリカというキャラクターの在り方を描いている。この物語では超人的な力をもった敵ではなく主に米国内のテロと戦うキャプテンアメリカが描かれる。その中でキャプテンアメリカは9.11テロで家族を失った男性がアラブ系とみられる青年を襲うのを食い止め、モノローグで以下のように述べる。

「彼らが残した流血の痕をこの地球上から一つ残さず消し去ることもできよう」(中略)「それでどうなる」「我々は、以前よりも強くあらねばならない」

「人として、国として」「アメリカであらねば」「さもなくば負けだ」⁸⁾

キャプテンアメリカはアメリカの精神の体現者として9.11テロの報復として無実の人を襲うことは「憎悪による盲目」であり「盲目ゆえに」「国家をして人の道を外させてしまうことすらあり得る」⁹⁾ という。その後、アメリカ国内で引き起こされたテロリズムの主犯を殺害¹⁰⁾ したキャプテンアメリカはマスクをとり、犯人を殺したのはアメリカではなく「私だ」とテレビの前で宣言した。

同時多発テロ直後に描かれた『Amazing Spider-Man #36』はコミックスの敵であったキャラクター¹¹⁾ が涙を流すなど事件に対する感傷的なものであった。しかし第二次世界大戦、冷戦を経験してきたアメリカであったが、戦時下でない状況でありながら民間人にここまで大規模な犠牲が出たことはなく、その衝撃はコミック作品の物語すらも大きく変えるものであった。

アメリカのコミックスにおいてスーパーヒーローは無実の民を悪の手から守るために戦いを繰り広げてきた。しかし同時多発テロで人々はなぜスーパーヒーローはこの悲惨な事件を食い止められなかったのかと空想の限界に気づく。アメリカという国の無実の国民がなぜ犠牲にならなければならなかったのか、なぜスーパーヒーローは助けに来ないのかという怒りに近い感情が読者の中に生まれつつあった。そのような中でコミックスは現実を無視してストーリーを作ることはできなくなった。そしてアメリカが攻撃を受けたことで「愛国」が叫ばれるようになったことも無視できなかった。スーパーヒーローという幻想を否定された、スーパーヒーローが活躍できない状況の中でスーパーヒーローの物語を作るとすれば、愛国のメッセージをもたせた結末に収束させることが最も無難かつ読者に、アメリカはスーパーヒーローに見放されたと思わせない方法であった。こうしてイデオロギーの対立であった冷戦で一度アメリカのコミックスから消えた政治が再び紙面に戻ってくることとなった。

そのような中で発表された『キャプテンアメリカ：ニューディール』はアメリカがテロ攻撃を受け、その後どのようにアメリカという国において生きてゆくべきかの指針を示したといえる作品で、アメリカの精神を体現した「キャプテンアメリカ」というキャラクターにしかできない作品であった。そしてやみくもな愛国に走らなかった点も作品として興味深い。報復や愛国、アメリカにおける自己憐憫を安易に描かずに、アメリカが過去に行った過ちを過ちとしてとらえ、そのうえでテロを正当化せず、かつ相手を倒して終わるかつてのスーパーヒーローの

ような結末は迎えずに作品を作り上げた。

犯人を殺したとマスクをとり宣言したキャプテンアメリカはアメリカが報復として殺したのではなく、あくまでスティーブ・ロジャース個人が殺したとしてアメリカという国への批難を個人へと向けさせると同時に、アメリカを体現するキャプテンアメリカですらアメリカのためという理由をつけて報復を行っていないにもかかわらず一般の市民がアメリカという大義のもとで報復はできない、すべて責任は個人に帰ってくるとアメリカ国民に釘を打ったといえる。

しかし同時にキャプテンアメリカは「スーパーヒーロー」から「ヒーロー」となる。

「マスクを脱いだら、もうスーパーヒーローじゃねえよ。パパが、言ってたぜ、ただのヒーローだって それなら、誰だって同じ事ができるってな。もしも……」 「本気でやろうと願って…本気で努力すればな……」¹²⁾

同時多発テロで空想のスーパーヒーローに幻滅した人々は、惨劇にいち早く駆けつけ救出活動や事態の收拾に努めた警察官や消防士をヒーローとして英雄視するようになった。マスクをとったキャプテンアメリカは超人的な力をもつ1人の市民であり、消防士と警察官と同様に市民としてアメリカのもとにあるためこのような発想に至ったと考えられる。しかし逆にいえばキャプテンアメリカであるスティーブ・ロジャースも警察官や消防士として働く市民も同列にヒーローなのである。彼らも本気でヒーローになろうと願い本気で努力したヒーローであるといっている。このヒーローとスーパーヒーローの差は後の作品『シビルウォー』で大きな意味をもつこととなる。

この作品は事故直後の哀悼や感傷から1つ抜け出した、現実と折衷しつつスーパーヒーローコミックスとスーパーヒーローの道を示した作品であり、9.11以降の作品として大きな意味をもつ。キャプテンアメリカ、そしてスーパーヒーローコミックスにおける「ニューディール」といえるだろう。

II バットマン——『バットマン：ダークナイト・リターンズ』と『ウォッチメン』

1980年代に入り冷戦対立構造がより緊迫するようになると、今までのスーパー

ヒーローとは全く異なるコミックスが人気を博す。特にコミック史を大きく変えたといわれる作品が、フランク・ミラー (Frank Miller) 作『バットマン：ダークナイト・リターンズ (The Batman: Dark Knight Returns)』である。

1986年に描きあげられた『バットマン：ダークナイト・リターンズ』は冷戦時のアメリカを舞台とし、バットマンとしての活動を引退したブルース・ウェインが再び自警活動を行い、政府をも相手取り戦うというストーリーである。当時の社会情勢における「スーパーヒーロー」という存在に疑問を投げかけつつ、そのあり方を描く作品であり、勧善懲悪ものでどこか牧歌的な雰囲気すらあったスーパーヒーローというジャンルを重厚なストーリーで描き出したことで非常に評価が高い作品である。

そして『バットマン：ダークナイト・リターンズ』と引き合いに出されることが多い作品が、アラン・ムーア (Alan Moore) 作『ウォッチメン (Watchmen)』である。『ウォッチメン』はスーパーヒーローが実在する架空のアメリカを描いている。しかし、「スーパーヒーロー」といえどもコスプレをしている自警集団であり、超人的な力をもった本当の意味での「スーパーヒーロー」は作中で1人しか登場しない。物語は覆面の自警集団を禁止する「キーン条約」が施行されるアメリカを舞台にドラマが展開される。主な登場人物は、アメリカ公認の「スーパーヒーロー」として「キーン条約」の中でも活動を続ける「コメディアン」、非公認の「スーパーヒーロー」として地下活動を続ける「ロールシャッハ」、唯一の真の「スーパーヒーロー」としてソ連に対する抑止力、国防の要として君臨する「Dr. マンハッタン」、キーン条約」制定前に引退し、未だに市民から人気を得、自身の会社の社長として富を築いた「オジマンディアス」、キーン条約」で引退したにもかかわらず未だに「スーパーヒーロー」としての活躍を望む「ナイトオウル」、母親から英才教育を受け後継ぐもヒーロー活動は押し付けられたと反発する「シルクスpekター」の6人である。そして「コメディアン」が何者かに殺害され、物語が始まる。それぞれが極端なスーパーヒーローの形を表しているが、6人がそれぞれ反社会的存在として描かれている。そして作中には冷戦構造が、特に終末時計が印象的に用いられ、ストーリーにも大きく関わる。

アメリカンコミックの歴史を変えたといわれる2つの作品が、同時期に同じ歴史的背景を舞台にスーパーヒーローの限界というテーマで描かれているのは非常に興味深い事実である。

『バットマン：ダークナイト・リターンズ』と『ウォッチメン』に関して、小

田切博が『戦争はいかに「マンガ」を変えるか』において興味深い考察をしている。

最初期のスーパーヒーローコミックスはスーパーマンにしろバットマンにしろおそろしく記号的な表現がなされており、ページ数が短いこともあってほとんどその人間的な内面は描かれない。(中略) そうした記号的な「絵」と「設定」と「エピソード」の平板な組み合わせからなる初期のスーパーヒーローコミックスから、(中略)「傷つくヒーロー」とその内面がスーパーヒーローコミックスのテーマとして急速に浮上してくることになる。(中略) ミラーの『ダークナイト』、そしてムーアの『ウォッチメン』はこの「内面をもつヒーロー」の物語の完成形を示したという意味で決定的な作品だった¹³⁾。

両作品とも登場人物が言葉に出さない心理描写によって物語が進む場面が非常に多い。その中で登場人物は悩み、痛み、苦しみ、怒りながら戦うのである。作中でのバットマンは愚痴に近い物言いによる心理描写とともに戦う。

「明日が思いやられる…」 「全身の筋肉が悲鳴を上げ、痛みで、身動きすらままならない事だろう」 「自分の歳を考えろ。もう若くはない……」¹⁴⁾

全編にわたってこのような独白をする場面がある。何が相手であっても決して負けない、「正義」のためなら迷うことなくこの身を捨てるという完全無欠の、かつてのスーパーヒーロー像とは大きく異なり、スーパーヒーローを一般的な人間と同じ次元で考察している。久しぶりに激しいスポーツをしたときと同じような悩みを抱えるバットマンに共感し、体が悲鳴を上げても戦い続けるからこそ感動するのだ。小田切博が述べたように、「傷つくヒーロー」とその内面というテーマは表裏一体である。

しかし、その全く逆を行くキャラクターが存在する。それが『ウォッチメン』に登場する Dr. マンハッタンである。彼はもともとごく平凡な人間であった。しかし不幸にもある実験の事故により全身を分解され、そこから再構築したことで復活した超人である。あらゆる原子を操る力を持ち、その力を用いれば過去、現在、未来に至るまで知ることができる、ほぼ全知全能の存在である。『ウォッチメン』という作品において唯一の超人であり、「かつてのスーパーヒーロー」に

対する強烈なアンチテーゼを示す存在でもある。

先述の通り、「傷つくヒーロー」とその内面は表裏一体であることを述べた。では傷つかない、ひいては死なない人間はどのような内面をもつのか。過去、現在、未来を知り、いつどこで何が起きるかすべて理解している人間はどうなってしまうのか。その過程が『ウォッチメン』ではDr. マンハッタン of 服装で描かれている。事故にあい復活した当初、Dr. マンハッタンは体毛のない青色の肌に白眼という異形でありながら他の人間と同じように公式の場ではタキシードを着ていた。しかし時が進むにつれて次第に肌の露出が増し、物語終盤では全裸となり、隠すことなく局部を晒している。Dr. マンハッタンは個人はおろか国家や社会という共同体を揺るがすほどに強大な力をもったため、もはや社会通念や恥、正義や悪という概念にすらとらわれることがなくなった。決して傷つかないため守ってもらう必要がない。望めばすべてが手に入るため契約という概念も必要ない。トマス・ホプズが提唱した社会契約論はあくまで人間同士のものであり、Dr. マンハッタンには必要がない。それを脱衣という形で象徴的に表わしている。スーパーマンに始まった「かつてのスーパーヒーロー」をメタ的ではあるが表した存在こそがDr. マンハッタンであり、『ウォッチメン』である。

『バットマン：ダークナイト・リターンズ』と『ウォッチメン』は冷戦に対する考え方も大きく異なる。『バットマン：ダークナイト・リターンズ』では極地戦争にアメリカ政府に仕えるスーパーマンが参加し、ソ連軍を打ち倒す。それに対しソ連軍は核ミサイルを発射するもスーパーマンが無人の砂漠に落とし無力化する。『ウォッチメン』ではDr. マンハッタンはすでに人間の理を超越しているため冷戦を食い止める気は全くなく、冷戦を食い止めるために物語の黒幕であるオジマンディアスがアメリカやソ連をはじめとする大都市に甚大な被害を与える攻撃をし、それを人類共通の脅威として認識させることでイデオロギーの対立を無理にでも止めるという策を実行し、成功する。

この両作品において決定的な違いは共通の描写以上に、スーパーヒーローという存在に対して『バットマン：ダークナイト・リターンズ』は超人の力をもった人間が正義を遂行するという「いいもの」対「わるもの」という図式を継承しているのに対して『ウォッチメン』はそれを完全に破壊し、登場するキャラクターにこれが正義であるといえるキャラクターがないという物語を描いている。

小野耕世は『アメリカンコミックス大全』において『バットマン：ダークナイト・リターンズ』を「ファシスト的」と評していた。小野が何をもってファシス

トという言葉を使ったか真意はくめないが、このような比較をすると「いいもの」対「わるもの」という一元的な構図を継承する『バットマン：ダークナイト・リターンズ』は「ファシスト的」といえなくはないであろう。しかし「ファシスト的」といってもコミックスの歴史において研究する価値は十分にある。

世界が滅亡するという核戦争の緊張を経たうえで描かれたこの2作品には前述の『キャプテンアメリカ：ニューディール』に近いスーパーヒーローへの絶望があるように思える。冷戦というイデオロギーの対立がどちらか一方の正義ではなく、その結果である世界滅亡の危機をスーパーヒーローは解決できなかった。そもそもしも超人的な力をもった者がいたとしてそれを解決できたかわからないという、ピンチになればスーパーヒーローが駆けつけてどのような問題でも解決してくれるという幻想を壊すような思いが広がった。その結果スーパーヒーローの内面を描き、超人的な力をもっていようと人間と同じように悩み、考える、力以外は人間と同じであるという作品になったと考えられる。特に『ウォッチメン』はそれが顕著でDr. マンハッタンに関しても、ごく普通の人間が超人的な力を手に入れたことによる人間性の喪失を思考実験として描き、スーパーマンがいたとして人間に都合のいいように働いてくれるわけがないということを表現している。

どちらの作品にもいえることは「いいもの」対「わるもの」の図式で成り立たない冷戦が、スーパーヒーローが絶対的な過ちを犯さない、さながら神のような存在であることを否定したということである。

Ⅲ アイアンマン

1 アイアンマンの登場と冷戦

「アイアンマン (Iron Man)」というマーベルのキャラクターがいる。日本ではあまりなじみがないキャラクターだが、アメリカではキャプテンアメリカ、マイティ・ソー (The Mighty Thor)¹⁵⁾ とともにアベンジャーズ (Avengers)¹⁶⁾ を代表するキャラクターとして人気を誇る。2008年には映画『アイアンマン』として日本でも公開され、日本での認知度も高まってきている。

アイアンマンの特徴は、正体のトニー・スターク (Tony Stark) が企業の社長としての財力、科学者としての知識を利用して作り出した高性能スーツを身にまとい戦うという点である。DC コミックス社のバットマンと似ているが、自警団 (ビジランテ) としてのバットマンと異なり公然としたヒーローとして活動する。

しかしトニー・スタークが経営する企業は何を扱っているかといえば、武器である。コミックスでアイアンマンが初登場したのは1963年『Tales of Suspense #39』であった。現実では1961年にジョン・F・ケネディ (John Fitzgerald Kennedy) が大統領になりベトナム戦争へのアメリカ軍の介入が始まった時期である。トニー・スタークは現実同様戦地と化したベトナムへ南ベトナム軍兵器の技術顧問として赴くが、北ベトナム軍に捕らわれ新兵器を開発するように強要される。監禁された北ベトナム軍のアジトでトニー・スタークは鋼鉄の強化服をつくり脱出する。急ごしらえだが、アイアンマンの代名詞である高性能スーツが誕生した。アイアンマンはその後トニー・スタークが経営する社の公式なボディガードとして発表されヒーロー活動を行うようになった。

キャプテンアメリカはアメリカの精神に則り悪と戦ったが、途中までアイアンマンは社のボディガードという性質上、自社にとっての敵、共産主義者と戦った。代表的なものは最初に登場したクリムゾン・ダイナモ (Crimson Dynamo) という共産主義国家で開発された高性能スーツであり、自由主義国家のアイアンマンと対するようなキャラクターである。またマンダリン (Mandarin) という中国の犯罪組織を率いる、自称「チンギス・カンの子孫」というキャラクターも登場する¹⁷⁾。

社長という立場を利用してスーパーヒーローとして活動する自由主義のアイアンマンに対して、共産主義の敵を現実の戦争に即した形でぶつけるのはすでに第二次世界大戦にてキャプテンアメリカでマーベル社は行っていた。つまりベトナム戦争と第二次世界大戦を同じように、アメリカが正義のために行う戦争という構図をコミックスに持ち込んだといえる。しかし、ベトナム戦争は1960年代に激化、連日その悲惨な様子を国民はテレビ等で知ることとなった。ベトナム戦争の激化を受けて若者の間で反戦運動が広く広がるようになり、アイアンマンは窮地に立たされる。

社長であるアイアンマンことトニー・スタークは武器商人として財を築いた人間である。現実のテレビから流れる悲惨な状況を作り出した張本人であるといっても過言ではない。反戦の世論が高まる中、読者はトニー・スタークに対する反感を強めた。そのような投書をうけ、マーベル社としてもアイアンマンをそのまま共産主義と戦うキャラクターにしておくわけにはいかず、方向転換を行うこととなる。

軍事産業から手を引いたトニー・スタークはその財を慈善事業に寄付、スー

パーヒーローとしての活動も企業や自由主義のためではなく正義のために振るようになる。敵の立ち位置も変化するようになり、クリムゾン・ダイナモは味方になるもアイアンマンを助けるために2代目のクリムゾン・ダイナモを道連れにして死亡、続く3代目もロシア政府とは独自路線をとるなど共産主義とは離れてゆく。コミックスからは冷戦の色はどんどん薄くなっていった。

スタン・リーは1975年にアイアンマンが描かれた時代について、「私たちのほとんどは純粹にあの傷ついた国で起こっている争いを本当に単純な善と悪の対立だと思っていたんだ¹⁸⁾」と述べており、アイアンマンの初期にあった冷戦における共産主義との単純な対立構造が誤りであったことを認めるに近い発言をしている。

アイアンマンが作品の方向性を変えた後のマーベル社のコミックスについて、『Comic Book Nation』では次のように語られている。

国中に広がる深い政治的な亀裂と急速な若年層の政治化に配慮して、1968年、彼はマーベルの持つべき最善のポリシーはその生命中枢を保持し、それが保守であれリベラルであれ、タカであれハトであれ、あらゆる種類の政治的な発言から遠ざかることだと結論づけた¹⁹⁾。

確かにここからしばらくスタン・リーはアイアンマンからは政治色をなくした。それはつまりアメリカのコミックスから政治というものが消えた事を意味した。再び政治がコミックスに戻るのは2001年9月11日同時多発テロ以降となる。

その中で生まれた傑作といわれる作品が、1979年『The Power of Iron Man』であり通称『Demon in a Bottle』である。この作品ではトニー・スタークがアルコール依存症になり、それを克服するまでの物語が描かれている。この物語、スーパーヒーローとしての活動を行いながら心がついていかないトニー・スタークの苦悩を描いている点が重要である。

トニー・スタークはキャプテンアメリカのような国のために己の命さえも喜んで捨てることができる精神はもち合わせていない。同じ富豪であるバットマンのような悪を心底憎む理由もない²⁰⁾。いうなれば突然スーパーヒーローになってしまったただの人である。そのような心が弱いアイアンマンであったが、頭脳とスーツの力で幸いにも敵に打ち勝ってきたためその弱さが露呈することはなかった。しかし、商売敵にスーツを改造され、トニー・スタークはアイアンマンとし

て殺人を犯してしまう。そのからくりはすぐに解明されるものの「アイアンマン」というキャラクターに対するイメージは最悪になり、その結果トニー・スタークは酒におぼれてしまう。これがキャプテンアメリカならそれでもなおアメリカのために戦い続け、バットマンも悪を根絶するために汚名を背負いながら戦ったであろう。しかしトニー・スタークのアイアンマンはそのような強固な意志に裏打ちされていない。そのため世間の評判とともに戦意も喪失してしまった。

しかし、現実のアイアンマンというキャラクターにとってはこの作品がプラスに働いたといえる。先述のとおり(Ⅱ. 2. 『バットマン:ダークナイト・リターンズ』と『ウォッチメン』)、アメリカンコミックスにおいてスーパーヒーローの内面を描くという作品はほとんどなかった。そのなかで企業の社長にしてスーパーヒーローであるアイアンマンという誰もがうらやむキャラクターの挫折と再生を、肉体的には一般人であるトニー・スタークの心の弱さをアルコールという液体を通して描き出したこの作品は今なお高い人気を得ている。アイアンマンが今の人気を確立した理由は、キャプテンアメリカをはじめとする他のスーパーヒーローにはない心の弱さを敢えて描き、一般市民に非常に近い心をもつキャラクターであると認識された点が大きいと考えられる。

2 『シビルウォー』

『シビルウォー (Civil War)』は2007年に出版された、マーベル社のスーパーヒーローが2つの勢力に分かれて戦う作品である。スーパーヒーローが2つの立場に立って戦うことの発端に、「スーパーヒューマン登録法」という架空の法律がアメリカで発案されたことがある。法律の内容は前述した『ウォッチメン』の「キーン条約」(Ⅱ. 2. 『バットマン:ダークナイト・リターンズ』と『ウォッチメン』)と似て、超人的な能力をもつ者がスーパーヒーローとして活動するためには政府機関へその正体とともに登録しなければならないというものであった。「スーパーヒューマン登録法」が提出されたきっかけとして若いスーパーヒーローがその能力を過信したばかりに起きた事故があり²¹⁾、その結果市民が超人的な能力をもつ者が自警活動を行うことを危険視するようになった。

この法案に賛成するアイアンマン側と反対するキャプテンアメリカ側で戦いが起きる。アイアンマンは、市民が正体を隠した自警集団に対する信頼を失っていることへ理解を示し、政府公認のスーパーヒーローとして活動を続け、ときには法案に反対するスーパーヒーローを拘留するためにキャプテンアメリカ側のスー

パーヒーローと戦うこともある。キャプテンアメリカがかたくなに法案に対して反対する理由は大きく2つあり、匿名性がスーパーヒーロー自身の安全性を守っているという点と、誰を悪とするかを政府が決めてはならないとする点である。

匿名であることがスーパーヒーローの安全を守るという理論は昔からなされてきた。多くのスーパーヒーローに表の顔があり、スーパーヒーローではない表の顔では仕事をする、家庭をもつなどごく普通の一般人として生活している。代表的なヒーローはスパイダーマン (Spider-Man) であり、彼は結果として蜘蛛の能力をもつが、もともとはごく普通の、さえないといっても過言でない高校生である。スパイダーマンとしての才能が開花してからも今まで通りの高校生活を送ってきた。しかし、正体がばれてしまうと今までどおりの生活が送れるとは限らない。超人的な力をもつため周囲から奇怪な目で見られ、敵に家族や友人を人質にとられ屈服するかもしれない。その意味をもって匿名性がスーパーヒーローの安全を守るといえる。そして匿名性こそが犯罪に対する抑止力ともなりうる。

誰かによって敵が決められてはならないという理論は、超人的な力をもつ者は何者にも利用されてはならない、常に平和を考えて行動すべきだとするものである。しかしこの理論は重大な二面性をもっている。スーパーヒーローが掲げる正義が絶対であるかどうかである。『シビルウォー』の中でキャプテンアメリカと S. H. I. E. L. D.²²⁾ 長官のヒル (Hill) が「スーパーヒューマン登録法」について会話をしているシーンがある。

キャプテンアメリカ「誰がスーパービラン²³⁾なのか、ワシントンが決めるような事態を避けるためにも我々は政治とは無縁でなければならんのだ」ヒル「仮面を被り、法を拒む。それこそスーパービランじゃないかしら」²⁴⁾

スーパーヒーローなのかそうでないのか。その判断は非常にきわどい。政府が絶対に正しいとするのならば政府の命令でベトナム戦争へ繰り出し北ベトナム軍を殺し片っ端から殺した『ウォッチメン』のコメディアンと Dr. マンハッタンは正義である。スーパーヒーローの判断が絶対に正しいとするならばかつてアメリカのためとして自身がアメリカの敵としたものを片っ端から倒した1950年代のキャプテンアメリカは正義である。しかし立場によってそれは簡単に悪とみなされる。

他の例として「パニッシャー (Punisher)」というキャラクターがマーベル社に

は存在する。他のヒーローと一線を画す特徴は、悪と判断すれば即座に撃ち殺すという点である。『シビルウォー』でもかつての敵2人がキャプテンアメリカ陣営に協力を申し出た次のコマで2人を撃ち殺す。それをとがめるキャプテンアメリカにパニッシャーは「強盗と人殺しだ」²⁵⁾と平然と言っている。しかしキャプテンアメリカにパニッシャーをとがめることはできない。キャプテンアメリカが自らの正義を振りかざし、パニッシャーが自身の正義を貫いたことを罰するのであれば、「スーパーヒューマン登録法」とキャプテンアメリカの関係と同じになってしまう。

キャプテンアメリカがいうように、ヒーローが権力に屈しては正義をなすことはできないともいえるが、スーパーヒーローをスーパーヒーローとする正義を定めなければスーパーヒーローという存在は非常にあいまいなものになってしまう。

アイアンマンは先述のキャプテンアメリカのように (I. 2. 『キャプテンアメリカ：ニューディール』)²⁶⁾ スーパーヒーローを警察官や消防士と同様の存在として、市民であることを前提としたヒーローにすることでその超人的な力を法のもとに帰属させることでヒーローとして高い自覚をもたせ、アメリカ市民に対して安心を提供することで解決を図ろうとした。

そもそもアイアンマンとキャプテンアメリカのキャラクター性は前項で述べたとおり全く異なり、キャプテンアメリカがアメリカの精神を具現化した、ある意味人間を超えた高い精神性を抱いているのに対し、アイアンマンは人気を気にするなどかなり一般人に近い精神構造をしている。そのためこの作品では市民の気持ちを酌んだ立場をとっていると考えられる。アイアンマンはもともとスーパーヒーローの中では珍しくその正体がトニー・スタークであることを公表している²⁷⁾。そのようなアイアンマンがこの法案を通すことへの説得性を高めているようにも見える。

覆面の自警集団、しかも『ウォッチメン』と異なりそれぞれが人間を超越した力をもっているとするならば、その活動を抑止する力とヒーローであるという自覚をもっていると確証がなければ信用はできない。

同時多発テロ以降、愛国意識が高まったのは先述したが (I. 2. 『キャプテンアメリカ：ニューディール』) それと同時にテロという姿がみえない敵がアメリカを襲うようになった。『シビルウォー』という作品自体、隣人がテロリストかもしれないという恐怖を経て、テロリズムを阻止、回避するために国民の情報を調査できる権限を拡大する「愛国者法 (Patriot Act)」をスーパーヒーローに置き換

えた内容であるととれる。

愛国者法が隣人を逮捕しない限り、隣人はテロリストではないということが証明される。それに近い安心を得るために「スーパーヒューマン登録法」が超人的な力をもった覆面の自警集団に発案された。

物語の終盤、賛成、反対両陣営がアメリカ市街地で総力戦を行う。そのせいで市街地は大変な被害を被り、その責任を感じたキャプテンアメリカがマスクを脱いで投降し、逮捕されたことで総力戦は終結し、愛国者法と同様に最終的に法案が可決されて終わる。この物語においてアイアンマンとキャプテンアメリカのどちらが正しいのかははっきりと描かれない。この作品はアイアンマンが説得性をもって市民が望む「スーパーヒューマン登録法」を推進しているがアイアンマン陣営は反対派のスーパーヒーローを誤って殺害している。かえってキャプテンアメリカもスーパーヒーローか否かの境界があいまいになっている。双方が絶対的に正しいとはいえない戦いである。しかし結果的にその争いの割を食ったのは一般の市民であり、スーパーヒーローが本来守るべきものである。

この作品が意味するところは、スーパーヒーローという存在の危うさ、正しさを競うように力を用いて戦うことは双方の間に無用な犠牲を生むということ、そして「自由」に代表される古き良きアメリカ精神は終わりつつあるということを表しているように考えられる。キャプテンアメリカは逮捕された後、護送中に暗殺される。そして初代キャプテンアメリカ、スティーブ・ロジャースに代わる新たなキャプテンアメリカが誕生する²⁶⁾。1940年代から続いたアメリカの精神はここで終わり、新たな世代が受け継ぐ。

IV 「スーパーヒーロー」

1 『American Power』

同時多発テロを経た後に『American Power』という冊子が発売された。この作品の表紙は筋骨隆々の男がオサマ・ビンラディンとみられる男を殴っている絵である。キャプテンアメリカがヒトラーを殴っている表紙が容易に想像できる。しかし『American Power』は発売されることはなかった。この表紙に疑問を抱いた出版社の出資者が発売中止を言い渡したためである。過去にキャプテンアメリカで行ったことを現代で再び行うことの何が問題なのかという声が上がりが、この作品は一躍有名となった。

『Captain America #1』のストーリーは舞台が第二次世界大戦であったがあくまでその構図は「いいもの」対「わるもの」であり、最初期の実に単純なスーパーヒーローの物語である。この作品は当時のアメリカ国民が感じていた矛盾をすっきりさせるために役だったことは先述の通りである(Ⅱ. 1. 第二次世界大戦)。しかしアメリカのスーパーヒーローは第二次世界大戦から冷戦を経てアメリカにおける正義が絶対のものでないことを学んだ。それはアイアンマンが途中から政治色を排し、『ウォッチメン』でスーパーヒーローが東西冷戦を「わるもの」を打ち倒すことで終結できなかったことから見てとれる。アメリカの正義はアメリカの正義であってスーパーヒーローの正義ではない。つまりアメリカのスーパーヒーローはこのときに、『シビルウォー』のキャプテンアメリカのように、政府の敵とスーパーヒーローの敵を切り離すようになった。このときにスーパーヒーローに求められる役割は「わるもの」を倒すことではなくなった。スーパーヒーローは規範を示し、読者が何が正義かを考えることを求めるようになった。そこにはアメリカという国の正義やイデオロギーの正義はなく、スーパーヒーローとしての規範があるだけである。

2011年には『Action Comics #900』でアメリカを代表するヒーローであるスーパーマンがアメリカ国籍を捨てるという大きな出来事が起きた。イランでの民主化運動に感じるところがあったスーパーマンはイラン政府と対立、それに対してアメリカ政府による内政干渉であるとの批判に、自分の行動がアメリカ政府の息がかかったものとみられることに嫌気がさしたとしてアメリカ国籍を捨てる決意を固め、地球へ視野を広げるといった物語である。この物語に対して読者からは賛否両論が上がっているが、スーパーヒーローが1つの視点から正義を唱えることから脱しつつあるとみることができる。

2 スーパーヒーローとは何か

かつて人々にはスーパーヒーローが現実のアメリカにふりかかる問題を解決してくれないかという願望があり、そしてそのように考える自身の心をすっきりとさせるためにスーパーヒーローが活躍するコミックスを読んでいた。しかし冷戦にかけてスーパーヒーローはいない、あるいはスーパーヒーローがいても現実の問題は解決できないという、読者がもっていた幻想を砕く考え方が登場し、ついには同時多発テロでそれが完全に破壊されたといえる。そこで読者にとってヒーローはスーパーヒーローではなく警察官や消防士など現実の人々となった。現実

と虚構がかい離する中で、スーパーヒーローに求められたものは自らの規範をもって行動することである。

近年大ヒットした、バットマンを題材とした映画『ダークナイト』では、バットマンが街の秩序と引き換えに自身が警察に追われるという結末を迎える。バットマンは特殊な装備や卓越した頭脳はもつものの、超人的な力をもたない人間である。そのバットマンがスーパーヒーローたるゆえんは自身の犠牲を伴っても街の平和のために戦うという規範のもとに戦うからである。

同時多発テロ以降現実と虚構を分けたアメリカは、超人的な力をもつ者が助けしてくれるという幻想の代わりに、スーパーヒーローがスーパーヒーローであるゆえんを彼らの行動規範にあると見出した。逆にスーパーヒーローが空想の産物であるとわきまえたうえであっても彼らの行動規範に則り、秩序を守る存在であれば、超人的な力やコスチュームを身にまとわなくてもスーパーヒーローであるといえると考えた。自らをスーパーヒーローとしたときに正しいか否かを考えた結果『American Power』のような作品は淘汰されたと考えられ、イラク戦争への反対デモにおいて若者が多かったとも考えられる。

スーパーヒーローの存在は国民の願望をかなえる存在から、人々のありようを説く存在になりつつある。しかしスーパーヒーローはいかなる世であっても人々が悩み苦しむ限り、その存在理由を変えたとしても、そばにあり続けるであろう。

- 1) この習慣がもたらした問題として、『スーパーマン』の原作者ジェリー・シーゲルと作画者ジョー・シャスターは出版社の DC コミックスに対して、正当な利益配分がされていないとして裁判を起こした例がある。最終的に DC コミックスは 2 人に対して終身年金の支払いと 2 人の名前をあらゆる派生作品に明記することで和解したが、現在でもこの習慣に対して改善を求める声が上がっている。
- 2) 小野耕世著『アメリカンコミックス大全』より、イタリアのルッカ市において 1993 年に開催された国際コミック大会で協議された定義。国際コミック大会の議事録等原典を探したが見つからず、この 2 項目のみを『アメリカンコミックス大全』から引用する。
- 3) 連載自体は 1895 年から始まっていたが、1896 年にカラー印刷によって主人公の服が白黒から黄色になり、それに伴って同年コミックスのタイトルも正式に『The Yellow Kid』となる。作風も 1 コマから連続したコマで物語を進める内容に変わっていった。そのためコミックス史の専門家の間では、コミックス史の起点としての『The Yellow Kid』の始まりは 1896 年という認識がなされている。
- 4) Bradford W. Wright, *Comic Book Nation* (The Johns Hopkins University Press,

2003) p. 9.

- 5) デヴィッド・ハジュー／著、小野耕世、中山ゆかり／訳『有害コミック撲滅！アメリカを変えた50年代「悪書」狩り』岩波書店、2012年、73-74頁
- 6) ハワード・ジン／著、猿谷要／監修、油井大三四郎／訳『民衆のアメリカ史 [下]』TBSブリタニカ、1982年、725頁。
- 7) 共産主義者とみれば誰かれ構わず倒してきた2代目キャプテンアメリカは体を強化する薬品の異状によって凶暴化し、行きすぎた愛国心をもってしまったため冷凍睡眠にかけられたという設定に変えられた。初代キャプテンアメリカも冷凍睡眠で1960年代に目を覚まし、2代目は1970年代に目を覚ました。当時の初代は相棒として黒人を連れていたため、2代目は初代を非国民として襲いかかった。2代目は黒人の社会進出がアメリカへの脅威と考えていたためである。
- 8) ジョン・ネイ・リーバー／作、ジョン・カサディ／絵、石川裕人／訳『キャプテンアメリカ：ニューディール』ヴィレッジブックス、2011年。
- 9) 同上。
- 10) キャプテンアメリカは基本的に、やむにやまれぬ場合を除き、意図して敵を殺害することは少ない。この場合もキャプテンアメリカに殺害の意志はなかったが、黒幕が用意した兵器によって主犯は殺された。
- 11) 涙を流したのは「Dr. ドゥーム (Dr. Doom)」というキャラクターであった。敵として非常に人気が高い。しかし Dr. ドゥームが涙を流したことに、感傷的すぎるとの批判を小野耕世は『アメリカンコミックス大全』で行っている。
- 12) ジョン・ネイ・リーバー／作、ジョン・カサディ／絵、石川裕人／訳『キャプテンアメリカ：ニューディール』ヴィレッジブックス、2011年。
- 13) 小田切博『戦争はいかに「マンガ」を変えるか アメリカンコミックスの変貌』NTT出版、2007年、232-233頁。
- 14) フランク・ミラー／作、クラウス・ジャンセン／絵、石川裕人、秋友克也／訳『バットマン：ダークナイト・リターンズ』小学館集英社プロダクション、2009年、36頁。
- 15) 北欧神話における同名の雷神「トール」から着想を得たキャラクター。日本ではなじみが薄いですが、アメリカでは人気のキャラクターである。キャプテンアメリカ、アイアンマンとともに後述のアベンジャーズ創立メンバーの1人。
- 16) マーベル社が自社に登場する独自の作品で活躍するスーパーヒーローを一堂に会してともに戦わせるという1963年に始まった企画名であり、スーパーヒーローのチーム名でもある。現在でもこのチームは解散しておらず、紙面で活躍している。本文で指しているのはスーパーヒーローのチーム名としてである。
- 17) 「mandarin」とは中国の高官を意味し、ここからも共産圏の中国を意識していたことがわかる。
- 18) Bradford W. Wright, *Comic Book Nation* (The Johns Hopkins University Press, 2003) p. 223.

- 19) 同上 p. 222.
- 20) ブルース・ウェインは幼いころ、強盗によって両親を目の前で殺害されたことで悪を心底憎むようになり、バットマンとして悪と戦うことを決意した。
- 21) 『シビルウォー』冒頭ではスーパーヒーローのドキュメンタリーを撮影するカメラマンの前で活躍しようとした若いスーパーヒーロー集団が自らの力を過信し、油断により敵の集団に対して無理な攻撃を仕掛けたため、敵が自爆、600人もの犠牲者を出した事件から物語は始まる。
- 22) マーベル社のコミックス内に登場する、国連所属のスーパーヒーローを管理する架空の国家組織。
- 23) 「Super villain」アメリカンコミックスでは悪役、敵役を指す際にこの言葉を使う。
- 24) マーク・ミラー／作、スティーブ・マクニーン／絵、石川裕人、御代しおり／訳『シビルウォー』ヴィレッジブックス、2011年。
- 25) 同上。
- 26) 『キャプテンアメリカ：ニューディール』におけるキャプテンアメリカと『シビルウォー』におけるキャプテンアメリカは別人であると考えていただきたい。アメリカンコミックスにおいては別雑誌で作者が変わって同キャラクターが描かれることが多く、その場合最低限の背景を除き、矛盾した内容が書かれることが間々あるためである。
- 27) トニー・スタークは、冒頭の事件で息子を亡くした母親からアイアンマンとして批難を受けたため、『シビルウォー』の世界においても正体は公表されていると考えられる。
- 28) エド・ブルベイガー／作、スティーブ・エプティング／絵、秋友克也／訳『デス・オブ・キャプテンアメリカ：デス・オブ・ドリーム』ヴィレッジブックス、2011年。

参考文献

- 小野耕世 『アメリカン・コミックス大全』 晶文社、2005年
- 小田切博 『戦争はいかに「マンガ」を変えるか—アメリカンコミックスの変貌』 NTT出版、2007年
- Bradford W. Wright, *Comic Book Nation* (The Johns Hopkins University Press, 2003)
- アラン・ムーア／作、デイク・ギボンズ／絵、石川裕人、秋友克也、沖恭一郎、海法紀光／訳『ウォッチメン』小学館集英社プロダクション、2009年
- フランク・ミラー／作、クラウス・ジャンセン／絵、石川裕人、秋友克也／訳『バットマン：ダークナイト・リターンズ』小学館集英社プロダクション、2009年
- マーク・ミラー／作、スティーブ・マクニーン／絵、石川裕人、御代しおり／訳『シビルウォー』ヴィレッジブックス、2011年
- エド・ブルベイガー／作、スティーブ・エプティング／絵、秋友克也／訳『デス・オブ・キャプテンアメリカ：デス・オブ・ドリーム』ヴィレッジブックス、2011年

- エド・ブルベイガー／作、ステイブ・エプティング／絵、石川裕人、近藤恭佳／訳
『デス・オブ・キャプテンアメリカ：バーデン・オブ・ドリーム』ヴィレッジブックス、2011年
- ジョン・ネイ・リーバー／作、ジョン・カサディ／絵、石川裕人／訳『キャプテンアメリカ：ニューディール』ヴィレッジブックス、2011年
- ハワード・ジン／著、猿谷要／監修、油井大三郎／訳『民衆のアメリカ史 [下]』TBSブリタニカ、1982年
- 鈴木道子『アメリカン・ミュージック・ヒーローズ—米国ポピュラー音楽の歴史』ショパン、2005年
- デヴィッド・ハジュー／著、小野耕世、中山ゆかり／訳『有害コミック撲滅！ アメリカを変えた50年代「悪書」狩り』岩波書店、2012年
- 中沢志保「アメリカの第二次世界大戦参戦とヘンリー・スティムンソン」文化学園大学『文化学園大学紀要 人文・社会学研究』20号、2012年
- トム・デファルコ、ピーター・サンダーズン、トム・ブレブルート、マイケル・タイテルバウム、ダニエル・ウォレス、アンドリュー・ダーリング、マット・フォーベック／著、柳亭英、光岡三ツ子、沢田京子／訳『THE MARVEL ENCYCLOPEDIA マーベル・キャラクター大辞典』小学館集英社プロダクション、2010年
- サイゾー premium『町山智浩の「映画がわかる アメリカがわかる」第9回 アイアンマンは本当に正義のヒーローなのか』(http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2008/06/post_995/) (2013年1月3日閲覧)
- 大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻都市共生社会研究分野『広がりを見せるアメリカの反戦運動』(<http://www.co-existing.com/essay/kh6.html>) (2013年1月9日閲覧)
- NEWSarama.com, Superman Renounces US Citizenship in ACTION COMICS #900 (<http://www.newsarama.com./comics/superman-renounces-us-citizenship-110428.html>) (2013年1月9日閲覧)